

熊本学園大学・水俣学講義

「石牟礼道子と水俣病 闘争の季節(とき)がきた」(2020年11月19日)

受講されるみなさまへ

本講義では、「石牟礼道子」と「邂逅」について思いをめぐらします。

辞書によると「邂逅」とは「思いがけなく会うこと。めぐりあい」という意味です。石牟礼道子は何と邂逅してきたか。熊本県の天草に生まれ、慈愛にみちたやさしい両親と邂逅しています。それなのに道子はこの世がいやでいやでたまりません。思春期の道子は呪詛のような文句をノートに書き散らします。文字との邂逅です。

代用教員時代、短歌と邂逅します。感情を託しやすい短詩形に生の希望を見出します。

以後の主な邂逅を列挙してみましょう。

熊本の短歌会での志賀狂太との邂逅。

異性として意識したひとつ下の弟一の死。

サークル村での森崎和江、上野英信との邂逅。聞き書きに目覚める。

女性史研究の高群逸枝、その夫、橋本憲三との邂逅。女性の苦難の歴史に思いをはせる。

渡辺京二との邂逅。ともに水俣病闘争に参加。文学・思想的同志となる。

その後、渡辺は道子と半世紀以上、行動を共にし、道子作品の成就に全身全霊で尽くします。道子の生涯で一番大きな出来事は渡辺京二との出会いです。渡辺にとっても道子との出会いは生涯を左右する出来事でした。ふたりはどうやって魂の邂逅を果たしたのか。本講義では、1968年にスタートした水俣病闘争をクローズアップし、闘争の原動力となったふたりの言葉をたどりま。闘争の原動力となったのは「言葉」でした。

講師紹介

米本浩二(よねもと・こうじ)1961年、徳島県生まれ。毎日新聞記者をへて、著述業。石牟礼道子資料保存会研究員。著書に『評伝 石牟礼道子 渚に立つひと』(新潮社、読売文学賞評論・伝記賞)など。最新刊は『魂の邂逅 石牟礼道子と渡辺京二』(新潮社)。